

The Standard on Jazz Piano Trio

ザ・スタンダード〜ジャズ・ピアノ・トリオ

- クレオパトラの夢 / スーパー・トリオ Cleopatra's Dream 〈B. Powell〉（3:56）
- 枯葉 / デヴィッド・ヘイズレルタイン・トリオ Autumn Leaves 〈J. Kosma〉（5:44）
- マイ・ハート・ビロングス・トゥ・ダディ / ニューヨーク・トリオ My Heart Belongs To Daddy 〈C. Porter〉（6:13）
- イツツ・オール・ライト・ウィズ・ミー / エディ・ヒギンズ・トリオ It's All Right With Me 〈C. Porter〉（6:14）
- ジャンゴ / サー・ローランド・ハナ・トリオ Django 〈J. Lewis〉（6:09）
- シャレード / スティーブ・キューン・トリオ Charade 〈H. Mancini〉（5:46）
- 朝日のようにさわやかに / ロマンティック・ジャズ・トリオ Softly As In A Morning Sunrise 〈S. Romberg〉（6:07）
- 危険な関係のブルース / ダン・ニマー・トリオ No Problem 〈A. Hamilton〉（7:55）
- アローン・トゥゲザー / ロブ・アフルベーク・トリオ Alone Together 〈A. Schwarz〉（3:08）
- やさしく歌って / レイチェルZ・トリオ Killing Me Softly With His Song 〈N. Gimbel〉（6:31）
- アイル・ビー・シーイング・ユー / アンドレア・ボツツァ・トリオ I'll Be Seeing You 〈S. Fain〉（5:28）
- オー・ホワット・ア・ビューティフル・モーニング / リッチー・バイラーク・トリオ Oh, What A Beautiful Morning 〈R. Rodgers〉（5:22）
- ラブ・フォー・セール / ジャッキー・テラソン・ジャズ・トリオ Love For Sale 〈C. Porter〉（6:23）

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound
Front Cover Photo：© The Estate of Jeanloup Sieff / G.I.P. Tokyo.
Designed by Taz.

ターで、彼は主題歌としてこの曲を作詞・作曲している。“ 変な顔でも、妙な笑顔でも、それがあなたらならわたしは大満足 ” という強烈なラブ・ソングで、すでに大きな名声を博していたポーターは、この曲とこのミュージカルの成功によってその地位をさらに不動のものとした。エディ・ヒギンズは彼にしては珍しい軽やかなタッチでこの曲を絶妙な歌心と共に演奏してみせる。

5. ジャンゴ（サー・ローランド・ハナ・トリオ）

ヨーロッパ音楽に強い憧憬を抱くピアニストのジョン・ルイスが、フランス生まれのジブシー・ギタリスト、ジャンゴ・ラインハルトに捧げて書いたオリジナル。ルイスが参加していたモダン・ジャズ・カルテットは惜しくも1995年をもって解散したが、この曲は発表された1954年からグループの解散まで、いつの時代も重要かつ人気の高いレパートリーのひとつだった。ソフィスティケートされた瀟洒なタッチでこの曲を演奏したルイスにならい、ローランド・ハナも淡々とした表現を用いることで個性を発揮していく。

6. シャレード（スティーヴ・キューン・トリオ）

オードリー・ヘップバーンが主演したロマンティックなサスペンス映画『シャレード』のために、映画音楽の巨匠ジョニー・マーサー（作詞）とヘンリー・マンシーニ（作曲）のゴールデン・コンビが1963年に書き下ろした名曲。ジャズではあまり取り上げられることはないが、それでもスタン・ゲッツ、ローランド・カーク、クインシー・ジョーンズなどの演奏が知られている。スティーヴ・キューンのトリオは、原曲が持つエキゾチックな要素を巧みに用いて見事なジャズ化に成功している。

7. 朝日のようにさわやかに（ロマンティック・ジャズ・トリオ）

1928年に公開されたミュージカル『ザ・ニュー・ムーン』から生まれた1曲。作者はオスカー・ハマースタイン2世（作詩）とシグムンド・ロンバーグ（作曲）で、彼らは「恋人よ我に帰れ」のソングライティング・チー

ジャズで取り上げられる曲には大別してスタンダードとジャズ・ミュージシャンが書いたオリジナル曲がある。これら以外にもさまざまな曲が演奏されるが、一番多い素材がこれらふたつであることに間違いはない。

スタンダードとは多くのミュージシャンやシンガーが取り上げる曲のことだ。大半はミュージカルや映画音楽のために書かれた曲である。かつてヒット曲と言えば、ほとんどがそうしたところから生まれていた。

それともうひとつ、マンハッタンにあったティン・パン・アレイと呼ばれる、音楽出版社が軒を並べる一角から生まれた曲もある。あとは、ジャズ・ミュージシャンが書いたオリジナル曲でも、多くのミュージシャンによってカヴァーされればそれもやがてはスタンダードの仲間入りを果す。

ミュージシャンがテーマ・メロディをどのように演奏し、そしてアドリブをしてみせるか。それがジャズの面白さだ。そのほかにもアンサンブルがどうだとかインタープレイがどうだとかいった興味もある。しかしお馴染みの曲をミュージシャンがどう解釈し、自分の音楽として表現するのか　そこにジャズのもっともわかりやすい楽しみ方があるのではないだろうか。

このCDに集められたトラックは、いずれも素晴らしいミュージシャンが演奏したものである。初心者にとっては初めて耳にするメロディもあるだろう。しかし、これらはいずれもジャズのスタンダードとして知られるものばかりだ。耳に馴染みがなくても、ここに収められた演奏を聴けば、そのときからそれはお馴染みの曲となるに違いない。

演奏紹介

1. クレオパトラの夢（スーパー・トリオ）

ピアニストのバド・パウエルは、ビバップの時代にセロニアス・モンクと共に歴史的な名演をいくつも残している。絶頂期は1940年代後半からの数年で、その後は精神の失調を来たし、決して好調とは言えなかった。しかしその時期（1958年）に発表されたこの曲は、ブルージーで親しみ易いメロディによって、パウエルの作品中もっとも人気の高い1曲になっている。それをケニー・バロン、ジェイ・レオンハート、アル・フォスターによるスーパー・トリオが、オリジナル・ヴァージョン以上にご機嫌なプレイで迫る。

2. 枯葉（デヴィッド・ヘイズレルタイン・トリオ）

ジャズのスタンダードとしてすっかり定着しているこの曲だが、シャンソンの名曲としてそれ以前からファンの間では親しまれていた。さらに原点を迎れば、最初はバレエ音楽として書かれたという。日本のジャズ・ファンがもっとも好きな曲、というデータも残されている。それをヘイズレルタインのトリオはスピーディな演奏でまとめてみせる。テーマ・メロディをベースが弾く趣向も意表をついていいい。

3. マイ・ハート・ビロングス・トゥ・ダディ（ニューヨーク・トリオ）

1938年にコール・ポーターが作詞・作曲したナンバーで、のちにマリリン・モンローが主演した映画『恋をしましょう』で彼女が歌ってから有名になった。「わたしの心はババのもの」という邦題が使われることもあり、そのことからわかるようにちょっと甘えた表現によるヴォーカル・ナンバーとして人気が高い。ニューヨークをベースに活躍しているピアニストのビル・チャーラップが中心になったニューヨーク・トリオは、この曲をかちっとしたタイプの演奏に仕上げさせてみせる。媚びることなく、端正なフレーズを積み重ねていくところが魅力だ。

4. イツツ・オールライト・ウィズ・ミー（エディ・ヒギンズ・トリオ）

大ヒット・ミュージカル『カン・カン』がニューヨークのブロードウェイで初演されたのは1953年のこと。その音楽を担当したのがコール・ポー

ムとしても知られている。ピアノ・トリオによる演奏ではソニー・クラーク・トリオのブルーノート盤が有名だが、ジョン・ディ・マルティーノを中心にしたロマンチック・ジャズ・トリオは、この曲を独特の解釈で演奏してみせる。高音を多用したフレージングが格別に個性的だ。

8. 危険な関係のブルース（ダン・ニマー・トリオ）

ロジェ・パディムが監督した1959年の映画『危険な関係』の主題曲用に、ピアニストのデューク・ジョーダンが書いたブルージーなナンバー。1960年前後のフランス映画界では、ジャズをサウンドトラックに用いるのがトレンドだった。マイルス・デイヴィスが音楽を担当した『死刑台のエレベーター』のヒットがきっかけとなって、この映画（『危険な関係』）でフィーチャーされたジャズ・メッセンジャーズによる演奏も同国で大ヒットしている。それをダン・ニマーのトリオがゴージャスな音使いでブルース・フィーリング豊かなところを聴かせてくれる。

9. アローン・トゥゲザー（ロブ・アフルベーク・トリオ）

1932年に上演されたブロードウェイ・ミュージカル『フライング・カラーズ』で紹介されたこの曲は、最初それほどのヒットはしなかったものの、その後にさまざまなシンガーやジャズ・ミュージシャンが取り上げたことでスタンダード・ソングのひとつになった。ロブ・アフルベーク・トリオによる演奏では、まず最初にベースがイントロからテーマのメロディを提示し、その後にアフルベークのピアノ・ソロへと進んでいく。続いて再びベース・ソロになる構成も面白い。

10. やさしく歌って（レイチェルZ・トリオ）

ジャズの要素も身につけたソウル・シンガー、ロバータ・フランクの出世作として知られる1973年のミリオン・ヒット。レイチェルZはフュージョン・グループのステップスで頭角を表したキーボード奏者。その彼女がアコースティック・ピアノで美しいプレイを繰り広げる。本来はピアニストとして活躍していただけあって、随所にご機嫌な歌心を散りばめたプレイが印象的だ。

11. アイル・ビー・シーイング・ユー（アンドレア・ボツツァ・トリオ）

ブロードウェイは厳しい。不入りが続けば打ち切りの決断がすぐに下される。そんなミュージカルのひとつが1938年に上演された『ライト・ジス・ウェイ』だ。しかし、オープンしてわずか2週間で上演中止になったこのミュージカルから思わぬヒット曲が生まれた。アンドレア・ボツツァ・トリオの演奏は軽やかなタッチを中心にしたもので、それが都会的な雰囲気を感じ出す。

12. オー・ホワット・ア・ビューティフル・モーニング（リッチー・バイラーク・トリオ）

数多くのスタンダードを作曲したりチャード・ロジャースによる名曲。ビル・エヴァンス派のピアニストとして注目を集めたりッチー・バイラークらしく、ここでもリリカルなタッチが全編にわたって認められる。押さえた表現ながら、情感豊かなプレイがいかにも彼らしい。

13. ラヴ・フォー・セール（ジャッキー・テラソン・ジャズ・トリオ）

ジャズ・ピアノの代表的なひとりになったジャッキー・テラソンだが、初リーダー作がヴィーナス・レコードに残されていたことはおおいに誇らしい。彼はこの演奏を含む『ラヴァー・マン』を吹き込んだ直後に「セロニアス・モンク・コンペティション」で第1位に輝き、名門ブルーノートと契約した。そんなテラソンだから、コール・ポーターが1930年のミュージカル『ザ・ニューヨーカーズ』のために書いたこの古い曲でも新鮮なタッチを披露する。彼が早くも大物の片鱗をここで示していることは言うまでもない。

[[c]WINGS 05122347：小川隆夫/TAKAO OGAWA]